る次第である。（四六倍版、定價二・五〇、東京堂刊）（吉田）

◉多賀神社史　多賀神社社務所編

近年各地の有名なる諸社寺の歴史の出版さるゝ事多きを加へ斯界を裨益しつゝあるが、今又こゝに「多賀神社史」の刊行を見るに至つた。本書は近江國犬上郡の官幣大社多賀神社の沿革を記述せるもので、最近の當社造營完成記念事業の一として、普く江湖に頒ち神德顯現に資せん爲の出版である。宮地直一博士鑒修の下に、文學士石村吉市氏主として草案の執筆に當り、旁ら三上左明、菅原敎信兩學士の助力を得て成つたものである。

先づ第一に祭神並に鎭座、社名の由來等を明かにし、奈良朝に及んで神封の寄進あり、それより漸次上下の崇敬を受けて社格の昇進し來つた消息を記してゐる。鎌倉時代に至つては社運隆昌に赴ひ、その中期以降は古文書の今日に保存せらるゝもの割合に多きが爲め、社内に氏座郡座の二座の發生を見た事、近江國に絶大なる勢力を占むる山門領に對して多賀氏が鎌倉幕府の武威を背景として永く繫ぎを續けた事等、日本社會史上興味ある叙述を見る事が出來る。五辻宮守良親王の御祈請、南北兩朝からの誘引等は吉野朝時代の抗爭史を窺ふに充分であらう。更に室町時代に至つては、鎌倉時代以來久しく勢力を振ひ來つた神官兼御家人の沒落に伴ひ、神宮寺不動院を上首とする社僧の活動となり全國的にその信仰を流布するに至つた如き、吉野朝時代に端を發する所の一般社務に關して協議を遂ぐる衆議機關の著しき發展の如き、又不動院神宮寺の坊人等の亂世の間に於ける目覺しき活躍の如き孰れも現存する古文書古記錄により精密に論究されてゐる。更に此時代から安土桃山時代にかけて將軍家始め六角、淺井、武田、大内、織田、豐臣諸氏の本社尊信の史實には當代武士の精神生活の一面を考へる事が出來るであらう。江戸時代に入りては、一社の基礎漸く固く、組織具はり、世々の別當は巧に公武上下の間に處し、神德の宣揚に努めて朝廷武家藩主の保護を受け、更に一般衆庶の間に迄、所謂多賀信仰を流布せしむるに至つた狀態を述べ、他面社領の寄進、社殿の造營、祭儀、社内の紛擾等が詳記されてゐる。而して最後に明治時代に及んで、神佛分離の大改革より昭和の大造營完成に至る迄の叙述で終つてゐる。

以上の如き内容を持つ本文の外、附錄として「現行年中行事」「古例祭式次第」「頭人名稱表」「社家系圖」「不動院歴代表」「社藏古文書目錄」「社藏古記錄目錄」等が添加され、圖版二十枚と相俟つて、讀者の理解に資する點大なるものがある。

要するに本書は多賀神社の起源より今日に至る迄の歴史的發達を記述するに當り、神社内部の組織制度の諸問題を扱ふと同時に、常に一般時代社會の動向との關聯に於て、その觀察の立脚點を求めたと見る事が出來よう。それは「多賀神社史」一卷に於て日本文化史の一部門を觀るのではなく、此の書に於ても亦日本文化の發展推移の跡を辿り得るであらう。換言せば此書は著者の明確な意圖の那邊に在りしかは別として、多賀神社の變

遷、多賀信仰の發展を文化史的に考へるといふ結果に持來されてゐるのである。(菊版二〇九頁、附錄一三三頁、圖版二十葉、非賣品、大岡山書店)〔時野谷〕

◉離宮八幡宮史

魚澄惣五郎
澤井浩三著

東海道線京都大阪の中間山崎驛に間近く鎭座する本宮は、數年前鐵道用地として境內の半ばを失つた。こゝに三府の製油業者有志が境域改修參賛會を組織し、社殿の改築・造營等の事業を起されたが、之を機緣として宮史の編纂が企てられる事となつた。かくて先に「古社寺の研究」を物された魚澄氏の圓熟した學問と、中世社會史を志す新鋭の學徒澤井氏の眞摯な研究と相俟つて、最も信頼すべき宮史を得た事は喜びにたへない所である。

當宮の所在山崎の地は上古より淀川流域の河港として聞え、京都といふ中世日本の心臟部の門關をなす要地であり、交通・經濟・軍事上等各方面に於いて、此の土地の中世史上に持つ意義は重大なものがあつた。本書はかゝる點に留意して、神社の歷史を述べると共に、常に大山崎の歷史地理的考察をなす事を忘れてゐない。

吾人にとつて最も興味あるものは油座としての大山崎神人の活動である。社寶の中心をなす古文書は殆んど全部此の事に關する所のもので、座の研究者の必ず引用するものであつた。今回は其等既知のものゝ他に、更に整理の分六十八通、他に當宮社家疋田・井尻兩家の文書記錄を採訪されて從來の研究に一歩を進められた。

座としては北野麴座・興福寺の兩門跡座・祇園綿座等が知られてゐるが、山崎の油座の如く鎌倉から織豐時代迄連續した史料を有するものは極めて稀である。且、その活動範圍が京都・近江・丹波・攝津等畿內を中心に、北陸・尾張・備前・阿波・肥後等遠隔の地に迄及んだ事は他に見られない所であらう。

かく座の研究にとり、最も重要なものに關し、現在なし得る限りの詳細な記述がなされてゐるから、その一々の紹介は到底限られた紙面上許されない所である。こゝには唯座は組合であるとの說を守つて、神人の團結に關して說いてゐる事を注意して置かう。

尙祭儀と神事に關しては日輪御移座の故事に則るといふ「日使頭祭」息長足姫尊が鉾紫に於て始め給うたといふ怨敵退散の大御神樂等があり、細男の神・人形等が用ゐられてゐる。此方面の研究に一史料を提供するものであらう。

重要な史料は卷頭に圖版として多數挿入されてゐて、研究者に多大の便宜を與へてゐる。

本書は非賣品であるが、別に「離宮八幡宮と大山崎神人」といふ名で京都星野書店より出版される。裝幀は此種のものに見られぬ淸楚な、感じのいゝ出來映である。(菊判百三十六頁、圖版二十一葉、賣出される分は百二十頁。貳圓)〔淸水〕